

2016年度

神戸国際高等学校入学試験

# 国語

(2016年2月10日実施、試験時間50分、100点満点)

(注意)

1. 解答用紙には必ず受験番号を記入してください。
2. 全ての問題に解答してください。
3. 解答は全て解答用紙に記入してください。記入方法を誤ると得点にはならないので、十分に注意してください。
4. 試験終了後、解答用紙のみ提出し、問題冊子は各自持ち帰ってください。

□ 次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。解答に字数の指定がある場合は、句読点やかっこなどの記号も字数として数えます。(設問の都合上、原文の表記を一部改めたところがあります。)

民族の歴史を語り伝えるにも、男女が愛をささやくにも、四季の移りゆきを見て歎きを歌うにも、人は言語を用いる。永遠のシンリを記し、未来の世界をソウゾウするにも言語にたよる。人は言語を持つことによって人間となった。

言語は一つ一つの言葉から成っている。個々の言葉は、そうしたソウダイな思想や、こまやかな感情を表現するのに欠いてはならない資材である。人々は、思想や判断を重んじて、どんな思想が世界を動かしたか、どんな結論が新たに世の中にもたらされたかを研究してきた。その際、個々の言葉そのものは、全体としての思想や判断を表現する材料にすぎないと多くの人は見てきたようだ。

A 表現に使われた一つ一つの言葉そのものを吟味すると、それは単なる材料にすぎないとは言えないことがハッキリする。

① 一つ一つの言葉は煉瓦造りの家の個々の煉瓦にたとえられる。たしかに煉瓦はその家を作る上で欠いてはならない重要な材料である。それなしでは言語表現が成り立たない点で、家を造る煉瓦と似ている。しかし、一つ一つの言葉と、個々の煉瓦との間には大きな相違が一つある。煉瓦はどれもこれも均一な形、色、大きさ、重さをもった資材である。ところが一つ一つの言葉は、それぞれがすべて意味の異なった資材である。

その一つ一つの言葉が言葉として人間社会に存在するには、その手順がある。(I) 人間が、自然界の存在物や、自然界ではたらく作用や、あるいは人間の動作、ものごとの性質とか状態などを一つの対象としてとらえる。(II) そのときそれに名前を与える。(III) 名前が与えられて初めてそれは社会的な対象となる。

(IV) その生まれた名前、つまり言葉がもし社会で、真に必要な言葉であるならば、それはその社会に一つの位置を占め、生存権を得る。(V) その社会の人々はその言葉を知り、理解しなければならなくなる。(VI)

B 春、夏、秋、冬という四季を表す言葉は、世界各国にあると思われるかもしれない。しかし、それは日本のような四季の移り

ゆきの明らかな国のことである。大陸の北部で春、夏の区別がほとんどないようなところに住む種族の言語には、春と夏とを分ける言葉がないという。② 一つの観念が社会的に成熟しないとき、その観念を指す言葉はその社会に存在しない。

C 馬に深い。関心を持つ生活を営む社会では、一歳の馬、二歳の馬、三歳の馬、妊娠したことがない馬、妊娠出産したことがある馬、その他実に多くの馬が、それぞれ別語で表現されるという。それはその社会での生活に、馬をそう区別して扱う必要があるからである。日本のように雨が多く降り、それが生活に密接な関係を持つ国では、雨に関して、小雨、水雨、春雨、五月雨、梅雨、秋雨、時雨、風花、野分その他、実に多くの言葉を持つ。しかもそれぞれに特別な情趣までまわりついている。このように、その社会で必要があるときには言葉は豊富さを加え、その社会に特定の物や観念が欠けていれば、それを指す言葉はない。

日本人は、タテという言葉で、垂直という観念と、前方後方に一直線という観念とを表す。しかし英語にはこの二つの観念の一つの言葉で表しうるものはないらしい。日本語のヨコは、上下垂直に対して水平面上の左右の方向をいい、また、はずれた方向という意味を指すけれども、英語には一語でこの二つの観念を表す言葉はないようだ。また、シブイ趣味という言葉があるが、シブイは本来、物の味についていう言葉である。英語には味の渋さを表す言葉はいくつかあるが、それが「地味で上品な味わいを持つ」という意味に転用されることはないらしい。

つまり、物事のとらえ方には、各社会にそれぞれ独自の型がある。その型はその社会の言語に投影され、言語の上の慣習として古くから伝承されてきて、④その社会の成員たちの物事の把握の仕方※暗々のうちに規制している。

このように見ると、個々の言葉は、判断や思想や情緒を、文として表現するための単なる資材であるということではできない。むしろ一つ一つの言葉自身が、その成立、展開、消滅という過程のうちに、その言葉を成立させた社会の状況、またその社会の人々の判断、感情、感覚を、率直に反映するものである。

（大野晋 『新版 日本語の世界』）

※暗々のうち…人の知らないうち。ひそか。内々。



□ 次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。解答に字数の指定がある場合は、句読点やかっこなどの記号も字数として数えます。(設問の都合上、原文の表記を一部改めたところがあります。)

膝の故障のためサッカー部を辞めた「ぼく」は、幼なじみの「美月」のすすめで二年ぶりに校庭を走った。走りながら膝が完治していたことを思い知り、無駄に過ごしていた二年間を心の中で後悔する。

最初は軽く走ってそのまま終わりにするつもりだった。でも、走り込むうちに自然とスピードが上がってきた。うまく言葉にできないけれど、体自身もつと自分を試したがっている。もう少し速く走れるんじゃないか、あとちよつと体のバネを使ってみてもいいんじゃないか。そして、大回りの五周目が終わるころには、自分でもびつくりするほどの全力疾走となっていた。

それでも、①体はまだまだぼくに要求してくる。もっと速く、もっと速く。ぼくは両手を思いっきり振って、めいっばい地面を蹴って走った。

陸上部のトラックにコースを変更する。トラックの直線の終わりをゴールと決めた。ラストスパートだ。息を止めて、体の中のすべての力をしぼり出すようにして、ゴールを駆け抜けた。②空がとても広く感じられる。入道雲がきらきらと光って見える。どこへでも飛んでいける羽なんていらなかもれない。こんなにも軽やかに走れる足が、ぼくにはあると知ってしまったいまは。

朝礼台に寝転がって息を整えた。疲れたけれど気持ちがいい。ラnpaートに出るように説得してくれた美月に、ありがとうと抱きつきたい気分だ。

「おい。優太」  
③呼びかけられてどきりとした。ゆつくりと体を起こす。C組の猫田だった。サッカー部でいっしょだったやつだ。

「やあ」  
弱々しい返事になる。逃げるようにサッカー部をやめたときから、サッカー部に④負い目を感じてしまう。嘘つきと見られているように思ってしまうのだ。

「元氣じゃないの。思いっきり走っちゃってさ」  
猫田がにやにやと笑いかけてくる。思わずぼくは自分の左膝に手

を当てた。いや、まだまだ膝が悪いけど、いやなことがあったから、やけになって走ってみようかな、なんて。

そんな言い訳が頭に思い浮かんだ。⑤しかし、膝から手を放して、はつきりと答えた。

「膝はもう治ったんだ。思いっきり走れるんだよ」

猫田は意外そうな顔をする。

「そうなのか」

「もうばっちり」

左膝をばんばんとはたいて見せると、猫田は残念そうに腕組みをした。猫田はぼくがフオワードからディフェンダーに回されたとき、逆にフオワードに⑥抜擢されたやつだ。ぼくがサッカー部を退部するときに、ライバルが減るからとやけにはしゃいでいたのも知っている。

「じゃあ、サッカー部に戻ってくるのかよ」

A 口調で猫田が訊いてくる。

「戻らないよ。いま戻ってもおまえらレギュラーにはかなわないし、足を引っ張るだけだからさ」

「そ、そうだよな」

猫田がほつとしたように笑い、べらべらと続けた。

「いま優太が戻ってきてても、そう簡単にまた元のレベルにまでうまくなるのはむずかしいもんな。それに、おれたち三年だつてこの夏が終われば部活は引退だし」

⑦「そうだな」

なぜか心に余裕があった。しつかりと負けを認める強さが、自分にはあるのだとうれしくなつたくらいだ。

サッカーのゴールからそれたボールが、こちらに転がってきた。それに気づいた猫田が、インサイドで※トラップする。

「じゃあ、おれ、もう行くよ」

猫田はボールをグラウンドに蹴り返す。走っていかうとする猫田を脅してやる。

「勝負は高校に入ってからだよ。もし敵だったら目にも見せてやるぜ」

「わ、わかったよ」

走り去る猫田を見送りながら、⑧何度も自分で言った言葉を噛みしめた。

勝負は高校に入ってから。

いまのぼくにはその言葉が、強がりでも、遠い希望でもなく、やがて来るほんとの未来として感じられた。ぼくは高校に行ってサッカーをふたたび始める。そのために、冬のあいだに練習を始めよう。すべて一からやりなおしてみよう。

( 関口尚 『空をつかむまで』 )

※トラップ：動いているボールを自分の支配下に置くために止める動作。

問1 | ①「体はぼくに要求してくる。」の部分で使われている表現技法を次のア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 直喩 イ 暗喩 ウ 倒置法 エ 擬人法 オ 体言止め

問2 | ②「空がとても広く感じられる。入道雲がきらきらと光つて見える」とありますが、この部分の「ぼく」の心情として最も適切なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 人生の理想を夢見ている。  
イ 恋に胸をときめかせている。  
ウ 自分の可能性を信じ始めている。  
エ 走ることへの情熱を感じている。

問3 | ③「呼びかけられてどきりとした」とありますが、それはどうしてですか、最も適切なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 美月のことを夢中で考えていたことを一瞬うしろめたく感じたから。  
イ 走ることのすばらしさに目覚めてサッカーに対する情熱がゆらいでいたから。  
ウ けがをやめたのに思い切り走っていると見られてしまったから。

エ 部活の時間中に寝転がっていると見られてしまったから。

問4 | ④「負い目」・⑥「抜擢」の意味を次のア～エから一つ選び、それぞれ記号で答えなさい。

④ ア 特定の人に負けているという気持ち。  
イ 自分の責任として自覚する事柄。  
ウ 気持ちに負担を感じている事柄。  
エ ある人に対して感じる憎しみ。

⑥ ア 多くの中から特に引き抜いてある役につけること。  
イ 全体の中から部分的に選択して利用すること。  
ウ 才能がある人を見抜いて特別に扱うこと。  
エ 人との縁で平凡な人を出世させること。

問5 | ⑤「しかし、膝から手を放して、はっきりと答えた」とありますが、ここから「ぼく」のどのような心情を読み取ることができますか。最も適切なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 猫田からレギュラーを奪い返したい、と反発を感じている。  
イ これ以上逃げ続けることはしたくないと、心に決めている。  
ウ 膝が悪いと言いつても無駄だろうと、諦めている。  
エ 猫田になら本当のことを話してもいい、と気持ちを許している。

問6 | Aに入る言葉として最も適切なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア うたぐり深い イ ほっとした  
ウ もつてまわった エ ふてくされた

問7 ①「そうだな」とありますが、このときの「ぼく」の心情として最も適切なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア レギュラーになった猫田が得意げに話すのが腹立たしく、猫田に対する敵意を必死で押さえている。  
イ 自分がやめることを喜んでいた猫田を恨みつづけていたが、猫田の言葉を冷静に受け止めることができた。  
ウ 猫田に対する怒りはなく、今の自分の状況を認め、未来へと考えを切り替える気持ちになっていた。  
エ 猫田に対して感じていたおそれが全くなり、むしろ別の意味で自分が勝っていると感じた。

問8 ⑧「何度も自分の言った言葉を噛みしめた」とありますが、ここで「ぼく」はどのような気持ちになっているのですか。六十五字以内で説明しなさい。

〔三〕 次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。（設問の都合上、原文の表記を一部改めたところがあります。）解答に字数の指定がある場合は、句読点やかっこなどの記号も字数として数えます。

※高名の木のぼりと言ひし<sup>a</sup>をのこ、人を※おきてて、高き木にのぼせて、梢<sup>こずえ</sup>を切らせしに、いと A 見えしほどは、言ふこともなくて、おるる時に、※軒<sup>のき</sup>たけばかりになりて、「あやまちすな。心しておりよ」と言葉をかけ※侍りしを、「※かばかりになりては、①飛びおるともおりなん、※いかに※かく言ふぞ」と申し侍りしかば、「その事に※候ふ。※目くるめき、枝<sup>b</sup>あやふきほどは、おのれが恐れ侍れば申さず。②あやまちは、やすき所になりて、必ずつかまつる事に候ふ」と言ふ。あやしき※下臈<sup>げろう</sup>なれども、聖人の※いましめになへり。鞆<sup>たもと</sup>も、かたき所を蹴出だしてのち、やすく思へば、必ず落つと※侍るやらん。

（吉田兼好 『徒然草』）

- ※高名の：有名な。
- ※おきてて：指図して。
- ※軒たけ：のきの高さ。
- ※侍り：丁寧語。です、ます、ございます。
- ※かばかり：これくらい。
- ※いかに：どうして。
- ※かく：このように。
- ※候ふ：丁寧語。です、ます、ございます。
- ※目くるめき：目がまわり。
- ※下臈：身分の低いもの。
- ※いましめ：教えさすこと。注意。教訓。
- ※侍るやらん：申すようです。

問1 Ⅱ a・bを現代仮名遣いで答えなさい。

問2 A に入る語として最も適切なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア やすく イ あやふく ウ 低く エ 近く

問3 ー①「飛びおるともおりなん」とありますが、この部分の訳として最も適切なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 飛んでいるときつと下まで落ちることになるだろう。
- イ 飛んでいたくても飛んだままではいけないだろう。
- ウ 飛んだとしても下まで落ちてしまうことはできないだろう。
- エ 飛んだとしてもきつと飛び降りることができるだろう。

問4 ー②「あやまちは、やすき所になりて、必ずつかまつる事に候ふ」とありますが、どうして「やすき所」で必ず「あやまち」をおかすのだと言うのですか、二十字以内で説明しなさい。

四 三の本文は古典の三大随筆の一つといわれる作品です。残りの三大随筆にあたるものとその作者を次のア～オから選び、それぞれ記号で答えなさい。

- |    |        |        |        |        |
|----|--------|--------|--------|--------|
| 作品 | ア 源氏物語 | イ 土佐日記 | ウ 方丈記  | エ 奥の細道 |
|    | オ 枕草子  |        |        |        |
| 作者 | ア 松尾芭蕉 | イ 鴨長明  | ウ 清少納言 | エ 紀貫之  |
|    | オ 紫式部  |        |        |        |